一頭は今は少しほそきかた　一總身はやせ候かた　以上

〔水虎考略後編〕分類故事要略云、封ハ小兒ノ形ノ如クナルモノトアレバ、カワラフノ類ニヤ、關東ノ人ハカハツハト云也、豐後國多アリ、人ヲモ牛馬ヲモトルナリ、形三歳ノ小兒ノ如ク、面ハ猿ニ似テ、身ニ異毛アリ、頂クボクシテ、水アレバ且强シ、水無レバ力ヲ失フ、或人トラヘテコレヲ殺ス、キレドモツケドモ通ラズ、麻穰ヲケヅリテサセバ能通ルト云傳フトアリ、安按、封ハ是ニ非ズ、或ハ水虎ニ當ツ、亦是未、吾本州ニテ川小僧或ハカハランベト云フ、コレニ捕レタル者適有リト傳フレドモ、正ク其形狀ヲ見タル人無シ、大和本草ニ河童ヲ載カハタラウト旁命ス、而云、此物好テ人ヲ相抱キテ角力、其身涎滑ニシテ、捕捉シ難シ、腥臭滿鼻、短刀ニテ欲刺不中、角力人ヲ水中ニ引入テ殺スコトアリ、人ニ勝コト能ハザレバ沒水而見エズ、其人忽恍惚トシテ如夢而歸家、病コト一月許、其証寒熱頭痛、遍身疼痛、爪ニテ抓タルアト有之云々、今此說ノ詳ナルヲ觀レバ、西土ニハ適コレニ逢フ者有リト見フ、コレニ逢テ病ムニ、シキミヲ煎ジテ飲メバ愈フト、一書ニ見ル、中華ノ何ニ中タルヲ知ラズ、

右尾人山本格安ガ、續和言默驢編時令部ニ載ス、

〔善庵隨筆〕當六月朔日、水戸浦より上り候河童丈三尺五寸餘、重十二貫目有之候、殊の外形より重く御座候、海中にて赤子の鳴聲夥敷いたし候間、獵師共船にて乘り廻り候へば、海の底にて御座候故、網を下し申し候處、色々の聲仕候、夫よりさしあみを引き廻し候へば、鰯網の內へ、十四五疋入候ひておどり出だし逃げ申候、船頭共棒かひなどにて、打ち候へども、ねばり付、一向にきゝ不申候、其內一疋船の內へ飛び込み候故、とまなど押しかけ、其上よりたゝき打ち殺し申し候、其節迄やはり赤子の鳴聲致し申し候、河童の鳴聲は、赤子の鳴聲同樣に御座候、打ち殺し候節、屁をこき申し候、誠に難堪にほひにて、船頭など、後にわずらひ申し候、打ち候棒かひなど、青くさきにほ